私の最高傑作は冥王です

屋猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の最高傑作は冥王です

【Ｎコード】
Ｎ４３２７ＢＡ

【作者名】
屋猫

【あらすじ】
魔女のジュラは魔の森で魔剣に体を貫かれた男を見つける。
その男を憐れに思ったジュラは、男の命を助けたのだが・・・
後に冥王として奈落の王となる魔剣士オズウェルと、冥王を生み出してしまった魔女ジュラの話し。

1　魔の森〈ナロモミ〉にて（前書き）

初投稿です

1　魔の森〈ナロモミ〉にて

ジュラは薬と防具の練成に使用する材料を調達し、魔の森（ナロモミ）の空を帰途についていた。

しかし突然、乗っていた騎獣が警戒態勢に入ったのだ。

騎獣の様子から魔物の気配ではない、騎獣が警戒しているほうへ慎重に近づいてみる。

やがて、騎獣が警戒していたものが何なのかジュラにも分かった。

血の臭いだ。濃い血の臭いが立ち込めている。それは、上空にいる防護布を口につけている、ジュラの所まで漂ってくる。

今は見えない地上は、どんな状態になっているのか。

しかし、ジュラが現在いる場所は魔の森（ナロモミ）とはいえ、その入り口付近である。最深部でもないのに、凶暴な魔物が出る事はまずない。

「・・・はぐれ妖魔でも出たのかなぁ」

地上には生き物の気配はしない。鬱蒼と茂る木々の間から、様子を窺うことは出来ない。だが、騎獣も血の臭いを警戒しているだけで、危険はなさそうである。

定期的に魔の森（ナロモミ）に来る身としては、様子を確認するくらいしておいた方がいいだろう。

騎獣に地上に降りるように指示する。ゆっくりと地上の様子が見えてくると、そこは血の海だった。

魔の森（ナロモミ）の大地は、土地全体が魔の瘴気を帯びているために青白い。そして草木は灰色を帯びてくすんでいる。

だがジュラが降り立ったそこは、辺り一面、鮮やかな赤に染め上げられていた。青白いはずの地面も、灰色の草木も赤い。真っ赤だ。

所々にみえる白っぽい物は、骨や肉片だろう。元の原型を判別するのは難しいが、人間だったようだ。

よくみると、赤い海には剣や鎧が沈んでいる。それから判断するに、どこかの国の騎士たちの物のようだ。

――・・・魔術の気配がする。何かの儀式かなぁ？

ざっと周囲の様子を見たジュラは、空間に立ち込める魔術の気配にに気付いた。魔女であるジュラが使う魔法とは構造が違うため、はっきりとは解らないが、何かを成す為に儀式的な魔術が行われていたようだ。

――複数の魔術の気配がする。複雑な構築をしているみたいだけど、・・・失敗したのかなぁ。

血の渇き具合から、半日近く経っているようだ。構築されていた魔術は殆ど拡散して、その全容は掴めない。残った余韻が獣達を遠ざけているが、それも直ぐに消えるだろう。明日には僅かな痕跡を残して、獣や下位の魔物が全て片付けてしまうに違いない。

ジュラはこの場に留まっても得られる情報はもないと、その場を発とうとした。

だがしかし、その時、微かな命の気配を感じた。
この地獄のような場所の中央付近。魔術の気配が一番濃い辺りだ。人間がこの場で生き延びているとは思えない。気のせいかもしれない。

ジュラが中央に近づくと、はたしてそこには、人間が生きて居た。

「驚いたこと。こんな状態で、生きているなんてねぇ」

その人間は全身血まみれで、肌の色も髪の色も分からない。体格からして男だろう。だが、背丈は解らない。
四肢が膝、肘辺りで千切れていたからだ。胸に中ほどで折れた両刃の剣が刺さっている。しかし、その胸は上下しているのだ。

「これは、・・・この剣に生かされているのかなぁ？」

男の状態はどう考えても人間が生きているはずのないものだ。上級魔族の中でも再生能力の高い者で無ければ、瀕死の状態だ。

「抜けば、死ぬかな？・・・いや、うーん、剣に魔力が？魔術が半端に起動してるのか？・・・抜いたら妖霊化しそうだなぁ。」

男に突き刺さっている剣。おそらく行使された魔術の影響で、不完全な魔剣と化しているようだ。　その剣の魔力の影響で男は死なない。しかし、半端な魔剣は、男を再生するほど魔力を持たないため男を回復させることは出来ず、結果的に

「死ねない状態でここに・・・。剣を埋め込めば、助かるかなぁ？いや、体は治るかもしれないが・・・、精神がどうなるか」

ジュラは男の状態を詳しく観察して、深く溜息をついた。このまま放っておけば、十中八九男は妖魔化するだろう。それも、ここに漂う数知れない無念の霊を抱えて。剣を抜けば男は死ぬが、その魂は魔術の影響を受け霊体の妖魔、妖霊となりそうだ。

男に刺さっている剣を浄化し、抜いてしまえば良いのだろうが、

「困ったな。このまま放置するのは物騒だが、解放することも出来ないし」

魔女のジュラは魔法を使うことができる。魔法は人間が使う魔術よりも高度で複雑な事象ををひき起こすことができるが、万能ではない。

人間の使う魔術は欠陥が多く、魔法で強引に干渉すると魔力が暴発してしまうことがあるのだ。

抜くには中途半端に作用している魔術に、魔法で干渉しなければいけないだろう。

「・・・仕方ないな。家に持って帰るか」

2　黒い森〈ミリロコウ〉にて

森で半死半生の男を見つけてから１３日目。ジュラは黒い森（ミリロコウ）にある、自宅に篭っていた。

ジュラは一年の半分を素材集めの旅、残りの半分を練成に費やしている。数ヶ月旅に出る事もあれば、同じく家に篭る事もある。

ジュラの自宅は、生活区間と錬金術を行う工房、そして、騎獣を飼育している小さな牧場で構成されている。

生活区間は千年を超える霊樹と融合しており、その地下は、試験的な魔法を行使する特殊な空間となっていた。

地下は霊樹の根があちこちから顔を出している。その根が、魔法の暴発を防ぐのだ。

地下の一番奥、根が絡みつくように白い塊を支えていた。３メートル以上はありそうな巨大な塊である。表面が細かい糸で覆われ、虫の繭の様である。

白い繭は鼓動のように淡い明滅を繰返している。ジュラは繭にそっと手を触れ、目を閉じて瞑想しているようだった。

「今晩、あたりかな」

繭から手を放すと、ジュラは眉間に皺を寄せて黙り込んだ。
そして視線を地下にある棚に移す。
地下の棚には、様々な魔具が置かれている。ローブ、楯、鎧など

の防具。剣、弓、斧、杖などの武具。聖気、邪気を帯びているものなど様々であるが、その中にガラス瓶に入った剣があった。

魔の森（ナロモミ）で男を貫いていた剣だ。折れた剣は赤黒く血に濡れたままで、本来の色は分からない。

そして、剣の先には脈打つ心臓が突き刺さっていた。

ジュラは男を家に連れ帰り、剣と男の肉体を分離させようとした。霊樹の根が守る地下でなら、多少強引でも問題ないだろうと判断したからだ。　しかし、予想外の問題が発生したのだ。

中途半端に魔剣と化していた剣は、これまた中途半端に男の肉体と融合していた。

行使された魔術と魔の森の瘴気、そして辺りに満ちていた無念の怨念が重なり、男の肉体を人ならざるものへと変えてしまっていた。

男の体は半分魔剣となっていたのだ。折れたように見えた剣は、その半分が男の体に溶け込んでしまっていた。

ジュラは当初、男と剣を分離し、剣は浄化して無に返し、男も人間として葬るつもりだった。

そもそも、剣が分離してしまえばその力で生きながらえている男は、死んでしまうはずだった。

しかし、計画的に起きた魔剣化ではないので、融合の仕方が複雑でなおかつ不完全なため、分離が不可能な状態になっていた。

男と剣を滅する方法もあるが、ジュラの魔力では魂までは滅ぼせない。深い恨みを抱えた魂は世界にとって、厄災にしかならないだろう。残る選択肢は男も剣も一緒に封印してしまうことだ。

それを霊樹の根元に埋めてしまえば、半永久的に見つかる事もないだろう。
そして、男も死地の境を半永久的に彷徨うことになるのだ。
ジュラはこの男が何処の誰なのか、善人か、悪人か、名前すら知らない。
だが、ジュラは赤の他人であるのこの男の境遇が、とてつもなく憐れになった。
だから、助ける事にしたのだ。人間でも無く、魔剣でもなくなってしまったこの男を。
失われた四肢の代わりを生成し、男の肉体と繋げた。
欠損していたのは他に、左目、臓器が幾つか、それらも全て入れ替えた。脳が無傷だったのは幸いだった。脳の再生は骨が折れるし、失敗しやすい。
おそらく、再生されて居なかった箇所は、魔剣が男を貫く前に負った傷だろうと思われた。ゆえに、魔剣は男の完全な状態を知らない、よって完全な再生が行われなかったのだ。
「止めを刺すために使われた剣が、その命を繋ぐなんてねぇ。」
男の肉体を改造しながら、ジュラはぽつりと呟いた。
だが、そこである考えが胸をよぎる。
――この剣が、男を殺すための物ではなく、この状態で生かし続けるためのものだったら？

その考えにジュラはぞっとする。人間は愛情深い者いるが、同じくらい残酷で冷酷な者もいることを、ジュラはよく知っていたからだ。

あらかた肉体の差し替えが終わると、元の肉体と馴染ませるために、男の体を妖天の繭の中に入れ特殊な羊水で満たした。

その作業に三日ほど掛かったが。その間も男と魔剣の融合は少しずつ進んでいた。男の体から出ていた部分は、当初の半分もない。

男を繭に入れてから１０日。魔剣は殆ど男の心臓と融合していた。棚に置いてある瓶は、魔剣の様子を見るための魔具だ。

今夜は満月、月が真上に来る頃には男と魔剣は完全に融合するだろう。そして妖天の繭は破れるはずである。

「結構無茶な繋げかたしたからな、ちゃんと人の形になってるかなぁ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4327ba/

私の最高傑作は冥王です

2012年1月12日02時48分発行